「愛顔（えがお）あふれる愛媛づくり」

令和元年度「知事とみんなの愛顔（えがお）でトーク」知事講話

開催日時：元.8.7(水)
開催場所：今治市クリーンセンター

皆さん、こんにちは。ちょうど夏休みの暑い季節ですけれども、貴重な一日をこの「愛顔でトーク」のために割いていただきましてありがとうございます。せっかくの機会ですから、日頃から思っている疑問であるとか質問であるとか、あるいは提案であるとか、高校生らしい発想力を心から期待させていただきたいと思いますんで、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

【社会情勢の急激な変化―情報通信技術の発展―】

昔は 10 年ひと昔という言葉が当たり前のように使われていました。10 年経ったらさすがに世の中は大きく変わるなあというふうな印象を持って、そんな言葉が飛び交っていましたけれども、今は１年でがらりと変わってしまうというようなとてつもない変化の速い、また大きな時代になりました。

特に一番変わったなと思うのは、やっぱり情報通信技術の驚異的な発展だったと思います。

30 年以上前、僕が社会人になったときは、世界に羽ばたこうということで総合商社というところに勤めました。当時は、通信手段、仕事で使う通信手段は３つしかなくて、１つは電話、固定電話ですね。もう１つがファクシミリ、当然電話回線を使ったファクシミリになります。そして、もう１つがテレックスという通信手段、文字のやりとりですね。この３つしかありませんでした。だからこそ情報は本当に偏りますし、そしてまた、時差というものが世界中を分断するようなことになっていましたから、その時差を活用してビジネスをしたりと、そんな時代でありました。

1980 年代の後半、中盤から後半になりますとインターネットという技術が登場します。このインターネットというのは大変な変化をもたらしました。世界が同時につながるということで、時差を感じずにやりとりができる。そしてまた、回線さえあれば地球上どこにいても、誰でもが等しく情報をキャッチできると、こういう時代になったわけであります。そこからだいたい 10 年おきに、このインターネットを活用した技術が加速度的に進化していきます。その進化というのはより速く、より大量に情報がやりとりできる。こういうふうなことが続いていくわけなんですけれども、10 年後になりますと、携帯電話が普及する。さらに 10 年経ちますと、音楽や写真、動画、こういったものが今までの機材にとって代わって携帯で使えるようになる。そしてまたさらに 10 年経ちますと、今の時代ですけれども、アプリケーションというものがどんどん開発されて、それぞれのスマートフォン等々にそれをダウンロードして用途をどんどん拡張する。そんなことが当たり前になりました。

そして来年以降、さらなる進化が待っています。これまでと同様により速く、より大量にという方向性は、そこは変わらないんですが、実はこれまでと違う新たな技術がそこに

導入されます。それは、同時に多重に接続が可能になるということ。こんな技術が入ってくる。そして、通信による遅れが大幅に解消される超低遅延が実現する。この２つが新しく加わると何が起こるか。いろんな情報を大量に同時に処理しますから、ここにＡＩであるとか、こういったものを組み込んで様々な分野の変化をもたらしていくことになります。これは、ひょっとしたら産業革命、あらゆる産業に革命をもたらすかもしれないし、人々の生活、あるいは働き方改革ということをよく言われますけれども、こういったところにも、大きな変化をもたらす可能性が出てまいります。より世界との垣根が低くなり、国際社会というのが身近なものになるというのが恐らく皆さんの社会に出ていく時代では当然のような姿になっているんだろうなというふうに思います。

そういう大きな変化が待ち受ける中で、逆に言えば地方でもいろんなことができるという時代がさらに進化するということになるんじゃないかなと。拠点を地方においてこうした技術を駆使すれば、何も都会に行かなくても大きなビジネス展開が可能になったり、地方における暮らし方も変わっていくということになるんじゃないかなというふうに思っています。

そういう中で、この段階で今県政が抱えている課題、県の行政というのは同時並行して一気に様々なことを常に追い求めなければなりませんけれども、その中からさらに抽出して大きなテーマ３つを掲げています。

【防災・減災対策】

その１つは、これはいつの時代も当然なんですけれども、県民の皆さんの命を守るという防災や減災、災害対応、これが第一の柱になります。この分野においては、例えばこちらの今治、上島、瀬戸内海側とそれから宇和海を抱える南予では対応の仕方も変わってきます。南予ですと津波、大きな津波にどう立ち向かうかということを重点的にやらなければいけないし、こちらのほうになりますと、工業地帯の大震災が来た時の液状化、堤防を越えた水害、こういったところに注力を置いた対処が必要になってきます。

（防災拠点の整備―県立学校等の耐震化―）

ただ、共通してやらなければならないこともいくつかありまして、その１つは、例えば大きな災害が起こったときに拠点となる施設、皆さんが通っている高校、こういったところは絶対に倒すわけにはいかないんで、ここはもう一気に耐震化を進めていくということで取り組んできました。昨年の３月の時点で県立学校については全ての耐震化工事が完了し、今私立高校が順次行っているという段階になっています。

（自助・共助の重要性―自主防災組織と防災士資格取得者の増加―）

そしてもう１つは、大きな災害が起こった場合は、消防団、消防署、人数が限られていますから、全ての被災現場に駆け付けることはできないわけであります。こういう時に一番大きな力になるのは、何よりも隣近所の助け合いの構図であります。この助け合いの構図をより緊密に強力にしていけば命の助かる確率も飛躍的に向上します。そこでこの７、８年の間、愛媛県では地区ごとに自主防災組織を結成していただき、そこに防災士という資格を持つリーダーを誕生させようということに注力をしてきました。今、愛媛県内には防災士の資格を取得した方が１万 3,000 人いらっしゃいます。この人数は 47 都道府県で比較しますと２番目に多い人数になっています。１番は圧倒的な人口を抱える東京都。しかし東京都ですら１万 4,800 人、愛媛県が１万 3,000 人、３番目は確か大分の１万人ぐらい

で、例えば、お隣の高知とか四国圏内ですと 2,000 人～4,000 人ぐらいという突出して多い人数になりました。この方々が横の連携をしながら防災・減災の情報共有や、あるいは刺激をし合って更なる高みを目指すというようなことを通じて頑張ってくれています。

昨年、西日本豪雨災害が起こったときに、このリーダーがしっかりと根付いて日頃の訓練を行い、また、避難の準備をしていたところは、あっという間に避難が完了して誰も命を落としていません。「まあ、そうは言っても大丈夫だろう」という油断をしていた地域で残念ながら犠牲者が出るということになりましたんで、より一層ここは強化していく必要性を感じているところであります。

（人命救助―ドクターヘリコプターの運航―）

また、今日は今治、上島ですから島しょ部ということで、これは大規模災害だけではないんですけども、島しょ部や山間部の人の命を救う手立てを考えて、２年前にドクターヘリコプターというヘリコプターによる大病院への搬送手段を立ち上げました。365 日、まあ日の出から日の入りまでですけれども、お医者さんと看護師さんが常時待機をしています。消防からの要請があると、必要と判断した場合は、あっという間に現場に到着しますけれども、そこにはお医者さんと看護師さんが乗っていますから、通信手段を駆使してそこでもう処置の指示を飛ばし、そして到着するや否やヘリコプターに乗っていただく。このヘリコプターは特別なやつなので、初期治療ができるような設備を整えていますので、必要とあらばそれをやる。そのまま大きな病院の屋上に飛んで行って到着すると、そこにはストレッチャーが待っていて、乗り換えた瞬間から手術室に直行していただく。こういうふうなことで、昨年１年間で約 300 回このドクターヘリコプターが飛んでいるわけで、それだけ人の命を救うことに大きな力を発揮してくれているんではないかなあというふうに思います。

こういうようなことと同時に、木造の住宅を耐震化するための補助制度を立ち上げたり、考えられるだけのことをやっていくというのがこの防災・減災対策のポイントになります。

【人口減少・少子高齢化対策】

そして２つ目の柱は、これも大問題なんですけれども、少子高齢化の、まあ子どもさんの人数が減ってお年寄りの人数が増えて全体的には人口が減り始めているのが今の日本の国であります。少子高齢化に伴う人口減少は一体何をもたらすのか。今、まだ実感がないんですけれども、２つの大きな問題を生じることにつながります。

（社会保障制度の現況と課題）

１つは日本の国の社会保障制度が根底からおかしくなるということ。今の日本の社会保障、皆さんはまだ実感がないと思いますが、年金であるとか保険であるとか介護であるとか、働き手の人数が多くて福祉のサービスを必要とするお年寄りが少ないというピラミッドのような人口構造の時代に、全てつくられました。ところが、どんどんその人口構造が変わっていって、ドラム缶型になり、現在では逆ピラミッド型の人口構造になったわけです。となると、ピラミッド型を前提に、稼ぐ、働ける人が多い中で作られたものですから、それが逆転すると、制度そのものが存続できなくなる。これをどう挽回していくかっていうのは、これからの大きなテーマになってきます。

（人口減少対策―３つの視点―）

そしてもう１つは、1 億 2,000 万人という日本の人口が、今まさに毎年毎年減り始めて

いますから、やがては9,000万人ぐらいになるだろうという予測が、30年後ぐらいにはなるだろうという予測が立てられていますけれども、何をもたらすのか。日本という国の市場が小っちゃくなっていくということですね。会社が物を作ってもそもそも買っていただく人の人数が減っていく。ということは、より一層それをカバーするために皆さんの時代は今まで以上に、外にも、地方にいながらも外に目向けてやっていかなきゃいけない時代になっていくということになろうかと思います。

そういうことをどうするかということで、今愛媛県では、まず人口を減らさないように少しでもするには何をやったらいいのかというところから入りました。

１つは出生率を上げていくということの徹底的なサポートをする。１つには人口が流出、愛媛県から外に出ていく人口流出をどう食い止めるか、ということが１つ。そしてもう１つは取り合いにはなってしまうんですけれども、外から来ていただく、人口流入をどう増加させていくか、という３点から政策展開をしているところでありまして、まだ具体的には、もし質問があれば、後でお話ししたいと思っていますけれども、こういったことを駆使しながら少子高齢化に伴う人口減少にも向き合っているのが今の実態であります。

【地域経済の活性化】

そして３つ目は、これは卵が先か鶏が先かという話にもなるんですけれども、何と言いますかね、地域が元気でなければ何もできないというこういう考え方なんですね。地域が元気ということは経済が元気だということ、経済が元気だということはそこに働く場が生まれる。働く場が生まれると、そこに働いている人に給料が支払われる。その給料をもって例えば消費活動が起こる。消費活動が起これば、当然お店の売り上げが上がって、また設備投資をする。そして、その企業が利益を上げて、その利益から税金を納める原資が生まれる。その税金の原資が行政に入ってきて、そのお金をもって福祉の充実や教育の充実や様々な政策につなげていくという、まあ風が吹けば桶屋が儲かるみたいな、何事もつながっているという、その根っこのところに地域経済を活性化させようという重要なポイントがあるということから、３つ目の柱は地域経済の活性化というところに置いています。

地域を元気にする手立てというのは、簡単に考えると、ある一定の地域がありました、そこを潤すための手段は２つ。１つは、そのエリアで作られているもの、あるいはサービスというものを外に向かって売って稼いでくるか、もう１つは外から人に来ていただいてそこでお金を落としていただくか、消費活動ですね。この２つに力点を置いています。

（愛媛県営業本部の役割）

愛媛県は公務員、公共団体でありながら、現在、それをお手伝いするために営業本部という組織を置いています。この部隊は県庁にいるメンバーではありません。どんどん外に出て、愛媛県庁で働きながらも全国を飛び歩いたり、世界を駆け巡ったり、そして新たな販路開拓を県庁マンが行うという、そしてそれを地域の企業の皆さんにつないでいくという、こんな仕事もしています。

（観光振興）

そして、外から人に来ていただくというのが一番手っ取り早いのが、観光という切り口ですけれども、特にこの今治では、10年前就任したときに、しまなみ海道という財産があるから、これをフル活用しようということをテーマに掲げました。四国には３つの橋が架かっていますけれども、唯一しまなみ海道は自転車の専用道があるということで、この特

色を活用しようということで、サイクリングを通じた世界からの誘客というところに１つの目標をおきました。そのために、三段階の計画で進めているところなんですが、第一段階はしまなみ海道を世界のサイクリストの聖地にする。第二段階は愛媛県にそれを広げて愛媛県全体をサイクリングパラダイスにする。そして第三段階はさらにそれを四国に広げて、四国全体をサイクリングアイランドにする。聖地、パラダイス、アイランドという短期、中期、長期の取組みを、今同時並行して進めているところであります。

おかげ様で、この８年間、世界大会の開催や世界の評価が重なり合って、全世界から訪れるような風景が定着してきました。ここの部分でいえば、10 年ひと昔かなあと。10 年前とは隔世の感がありますけれども、その地域にあるものをどう生かしていくか。しかも、それは個性というものをどう出していくか。ここが鍵を握っているのは観光振興のポイントになってまいります。

こうしたような３つの柱というものを掲げながら、愛媛県、それ以外ももちろんやりますけれども、進めているところでありますけれども、今日は皆さん、先ほど冒頭に申し上げたように、いろんな意見を出していただけたらと思いますので、限られた時間ですけれども最後までよろしくお願い申し上げて、私からのお話とさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。